

# 健康教育研究(V)

## —大学公開講座「くらしと健康」2008

山本 万喜雄<sup>1)</sup>

### Health education study(V)

#### —Open college “life and health”2008—

Makio Yamamoto<sup>1</sup>

**Key words : health education, open college, 2008**

**(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education,  
Ehime University, 6, 83-87, March, 2009)**

キーワード：健康教育、大学公開講座、2008年

### I 研究目的

1974年愛媛大学教育学部に着任以来、国民のための大学づくりに寄与するべく地域に根ざした教育研究の在り方を模索してきた。その成果の一端は、『子育てはよろこび』<sup>1)</sup>、『共育はよろこび』<sup>2)</sup>などの著書および『愛媛大学教育学部保健体育紀要』<sup>3)</sup>に報告してきたところである。

とりわけ大学公開講座に関しては2000年、その成立・発展過程をたどり、次の諸点を明らかにしてきた。

- ① 自主講座として出発
- ② 住民に奉仕する公開講座
- ③ 文科省の政策は受益者負担の傾向であること

ところで、この講座は多くの受講者に支持され、その後も継続し、次のような新聞記事になり報道された。

「公開講座『くらしと健康』が、開講30年を迎えた。06年度の講座修了式では80代の女性ら34人が山本教授から修了証を贈られた。」<sup>4)</sup>

本稿の目的は、2008年度の大学公開講座「くらしと健康」の内容・方法そして受講者による評価を明らかにするとともに、生涯学習における本講座の役割を考察するものであり、健康教育研究(Ⅲ)の続報という位置づけである。

### 第一章 講座「くらしと健康」の内容と方法

この30年、大学公開講座「くらしと健康」は、毎年7月から12月にかけて20時間、月1回のペースで日曜日の午後に開講してきた。

本講座は、生涯学習の充実が要望されている今日の状況に対応するべく一般社会人を対象にして開設されるものである。

#### 1 講座のテーマと内容・方法

2008年の講座のテーマと内容は、次の通りである。実施要領の記述を引用することにした。

「人の健康は、人々の暮らし方が関係しあつて良くもなるし、その逆にもなるものです。私たちは、人間らしい生活を営むために、心も体もそして生活の周辺にも配慮し、望ましいものにするための努力を積み重ねていかなければなりません。本講座では、健康・発達・教育及び環境のテーマに迫るとともにとりわけ今年は、映画「SICKO(シッコ)」を観て、国民の健康と社会保障について語り合いたいと思います。」

〈日程〉

1) 愛媛大学教育学部  
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,  
Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,  
Japan

1	2008 7.6	開講にあたって「くらしと健康」を学ぶ
2	8.31	映画「SICKO」を観て
3	9.14	ビデオ「食の未来」を観て
4	10.19	子供の発達保障「トスカの微笑み—障害児教育の実例」
5	11.2	北欧の教育・福祉
6	12.7	「くらしと健康」を総括する、修了式

講師は、山本（実施責任者）と向井康雄。

募集定員は50人。講習料は8200円。

例年のようにこの募集は、マスコミによる周知と、かつての受講者への郵送によった。2008年は、愛媛県内はもとより、大阪、岡山、徳島から49人の参加者があった。今年初めての出会いもあったが、本講座への参加はリピーターが多いのも一つの特徴である。欠席の場合は必ず、翌日その回で使った資料を郵送している。その際、講義の要約を同封している。たとえば第5回の11月、資料「ストックホルム7日間」

① オムソーリ～自治と連帯<sup>5)</sup>

向井康雄

ストックホルムはスウェーデン（人口は860万）を代表する都市であり、人口は65万人である。

そのストックホルムに7日間滞在し、オムソーリ（omsorg）という言葉をよく耳にした。また文献にもよく用いられている。オムソーリの意味は、だれかと一緒に「かまひ合う、面倒をみる、分かち合う、気にかける」などと解釈される。

個人が最大限に尊重されるこの国において、オムソーリ（連帯）がなぜもてはやされるのか不思議に思えるのである。

北欧の厳しい自然環境の中で、多くの北米への移住者を出した貧農の国から、緩やかに近代工業福祉国への脱皮をとげた要因は、まず労働組合による政治力があげられ、「スウェーデン・モデル」といわれた労使の協力協調路線を構えたことにある。

わが国や米国のような個人や企業単位の福祉より、国民全体の福祉作りを早くから目標とした成果であろう。

ストックホルムの中心街に、老人施設を有するこの国の福祉サービスは、日常の人々の相互のかかわり合いから社会のケア・システムが与えられる病人、弱者、危険にさらされた人々のためのあらゆる介護、介抱、養護、さらに児童手当から年金まで、人生の異なった各々の時期に社会が再分配する経済的保証までを包括する

ものがオムソーリである。

「高福祉高負担」の国として、スウェーデンはよく引き合いに出される。そして金持ちが海外へ流出するともいわれる。

なるほど税金は高い。しかし、よく観察してみると、税金は集団保険をかけるようなもので、個人的にはパカンスを楽しむ蓄えはあっても、生命保険や傷害保険などの契約をする必要もなく、貯蓄額は極めて低い生活をしている。

外国の観光客に課すお土産の物品税は、所定の手続きさえしておけば、空港の税関で、総額の15%を返還してくれる。このような制度は、北欧以外にはまずないであろう。

人々は、この国の政治を信頼し、安心して所得の一部を社会へ納めている。

週40時間の労働、週休2日制、年間5週以上の有給休暇など恵まれた労働条件や、低廉医療制度、無償学校制度などの上にとっているのが、この国の社会保障・福祉制度なのである。

それらの仕組みは、真に個人と集団、民衆と国家とのみごとなシンフォニーといえる。

本講座の特徴の一つは、受講者の経験を積極的に生かすということである。この日は、スウェーデン、デンマークを旅した一人が、こんな感想を記してくれた。

「2002年9月に福祉関係の方10名余りの方にひっついてスウェーデン8日、デンマーク4日の旅をしました。ストックホルムについては総選挙の前日。駅前の各政党の選挙事務所は同じログハウス。選挙当日は投票所にまで入れてくれました。入り口でも各党の支持者がキャンペーンをはっていました。投票率が80%台まで下がったと大騒ぎしていました。それと高校生にも電子投票をさせているとのこと。もちろん選挙権はないのであくまで“明日の投票”のため、政治教育という感じでした。でも各高校へ党首が訪れて熱心に演説をするとのこと。『政治教育はどうあるべきか』ということを社会科の教員として考えさせられました（中略）

北欧の素晴らしさを友人に言うと、『税金が高い』ことと『人口が少ない』という反論が返ってきます。『人口が少ないから』という反論に対する反論はどう言えはいいのかわ、というのが今の問題です。」

欠席者はこのような生の実感は持てない。しかし、山本はその日に配布された資料の束に添えて講義内容の概要を同封して郵送する。

「深まる秋の中、いかがお過ごしでしょうか。さて 11

月の公開講座は「北欧と教育・福祉がテーマでした。いま世界中から注目されている北欧の国々、とりわけスウェーデンとフィンランドを中心に海外事情にも詳しい向井の方から講義がありました。資料を参考にいただければ幸いです。

次に、世界一の「学力」で話題になっているフィンランドの教育とその背景について、田中孝彦氏の「フィンランドの高校生たちが人生について考えていること」<sup>6)</sup>を参考に、山本が要約しました。

- ① フィンランドの子どもたちの「好成績」の土台には、無償の医療・福祉・教育が提供されるという社会システムがあること。
- ② フィンランドの歴史と深くかかわっていることだが、母語（フィンランド語）による教育の重要性に対する強い信念があること。
- ③ 読書の習慣が広く浸透しており、図書館のネットワークが充実していること。
- ④ すべての子どもに平等に質の高い教育を受ける権利が保障されていること。
- ⑤ 教師の基礎資格は大学院修了であり、裁量権が教育現場にゆだねられていること。

続いて、スウェーデンでお孫さんたちが子育て体験をされた方から「自律・自立」に関する興味深いお話がありました。

いよいよ来月は最終回。今年度の総括と終了式・恒例の持ち寄り会食です。お会いできる日を楽しみにしています。  
(2008, 11, 4)

受講者は社会人である。それ故、時には欠席することもある。しかし、資料だけは確実に届けるようにしている。一人ひとりを大切にすることが教育の仕事には不可欠と考えている。受講者と心の架け橋をかけるための手紙による交流がリピーター受講者を迎えているのかと思う。

## 第二章 受講者による講座への評価

### —私にとっての公開講座—

健康な時、健康の価値に気付くこと。そしていのちとくらしと生き方を切り結ぶこと。それが担当者の願いである。「受講は健康のバロメーター」という便りが示すように、この講座を受講できることが、健康である証拠と言えるようである。

さて、書くことは考えること。この章では、受講者の「私にとっての公開講座」を六編紹介する。

#### (1) 楽しい中で再認識したこと

矢野サキエ

公開講座、楽しく参加させていただきました。一番印象に残っているのは「SICKO」です。普段の生活では見

る機会もなかったと思います。(中略) 私たちの生活の中で、情報はあふれているけれども、結局は、好みのものしか見えないし、聞こえない。実際には見ようもしないし、聞こうもしないわけです。そういう中で、今回の映画は目から鱗でした。少し前に、アメリカでは医療問題で自己破産したといった内容のものが、テレビで流れていたのを見たことがあります。このときは画像としてみたけれども、自分の中ではあまり関係のないことでした。

一回目のとき向井先生がご自身の保険のことを話されました。そして今回の映画「SICKO」と以前のテレビでみたことが、ジグソーパズルをしているような感覚でつながってきました。今までは日本もアメリカも同じような医療保険制度だと勘違いをしていました。契約した中での治療しか受けられないなんて信じられないですね。実際には、私の保険料は給料から自動的に天引きされていて、病院の窓口では三割負担で支払って、結局は自分たちが掛けている中での医療制度だということをあらためて認識しました。そして社会保障の充実した国とは大きく違うことも再認識しました。興味がなくなるとか、自分には関係ないですませたいはいけません。(後略)

#### (2) 私にとっての公開講座

高田千寿子

暑い夏を挟んでの半年が過ぎました。

今年もまた「目からうろこ」が何枚も落ちました。毎日を流されるままに生きている私にとって、公開講座は刺激たっぷりの時間です。日々触れる報道や情勢を、たとえ気になっていても受け流している私に、考える時間を持たせてくれるのです。わかりやすく解説していただき不条理を知れば、新聞を読むのも興味を持って隅々まで読めます。ニュースを聞きながら突っ込みを入れたりしつつ、自分の意見が出てきたりもします。たまには家族に知ったかぶりもできます。この年齢になって、新しいことを知る喜びを得られることは、幸せなことだと感じています。もっと知りたい、もっと考えなければと、毎年講座修了のとき思い、次の年の開講を楽しみに待っています。

来年はどんな映画が見られるでしょうか？どんな本を紹介していただけますか。世の中はどんなふうになっているのでしょうか。世界は不安なことばかりですが、元気に明るく7月を迎えられるよう、好奇心のアンテナを磨いて待っていたいと思っております。私の生活の中で、心地いい癖になる刺激の時間、それが公開講座「くらしと健康」なのです。

#### (3) 豊かに生きていくために

長野瑞恵

娘の愛大入学と同時に受講を始めた公開講座も今年で8年目になりました。初めは何もわからず、何も聞けず、

何も言えず、ただ学ぼうという気持ちはありましたから、いろいろと教えていただき、視野が広がったと満足していました。(中略)

回を重ねていくと、いろいろな事本気で腹が立ったり、また涙が出たり、うれしかったり共感が持てるようになりました。先生が言われていることもこういうことなのかとやっとならぬようになりました。いろいろな人の話もしっかり聞けるようになったのは、自分が優しくなれたからだと思います。最初は遠慮がちに行っていた公開講座も毎年の恒例になり少々忙しい時も家族は気持ちよく行かせてくれます。初めは無関心だった主人も、私の変化に気づいたのか、講座の内容を聞いたり、私も資料を見せたりするようになりました。この頃はこんな本があるよと主人に話したり、居間に置いてある資料についていろいろ話したりお互いの意見を言うようになりました。次の公開講座はこの本でこんな話をするよと、主人が予想したりもします。

今、親の介護でいろいろと大変な時期ですが、豊かな気持ちで、みんなで優しく父を看れるのは公開講座の成果だと思います。

夫とお互い疲れた時は弱みも見せあい、少しわがままも言い合い、意見が違ったらわかってもらおうと激しく話し合い、また感謝の気持ちも表わし・・・

私にとって公開講座は、豊かに生きていくための生き方、愛し方を学ぶところです。

#### (4) 初めて受講して

横島恵美子

友人の紹介で今年初めて受講しましたが、山本先生が言われていたように受講者自身が共に学びあう場であり多くの世界が広がりました。今年特に問題になった「食」の問題では輸入米の流れ、産地表示の仕組み、遺伝子組み換えの実情について学びました。映画「シッコ」からは医療現場を通して社会保障のあり方を深く考えさせられました。

また、日本と北欧の教育に対する基本的な考え方の違いを改めて感じながら、今後子供たちに接するときのヒントを数多く得ました。年齢や職業の異なる受講生の体験談は未来へ向けて現実を直視するきっかけにもなりました。最終回の持ち寄り会食では皆さんの腕自慢料理をごちそうになりながら、料理に隠されたエピソードを聞き楽しいひとときでした。

言葉は交わさなくても顔馴染みの方達も増え来年の受講を楽しみにしています。

#### (5) 娘の死にこだわって

阿部ヒロ子

今年度も待ちどおしく始まった講座でしたが、半年間の

6回はあっという間に終了したように思います。6回分の資料の整理をしてみると本当にもったいないほど充実した時間を過ごさせていただいたとありがたく思います。普段、新聞の記事もいろいろ読んでいたことが、ということだったんだと講義の中からは知ることが多く、北欧の国々の教育とか、福祉の問題に触れた時もそう思いました。しかし、今私たちの目の前にある教育のこと、福祉のこと、「シッコ」を覗いて医療の問題も考えさせられることばかりです。いろいろと真実を知ることがあります。目を見ても、何をすべきか何ができるのか考えていきたいと思っています。

修了証書を大切にしまっておこうと枚数をみれば15枚にも・・・最初の年は94年、娘の裁判の判決の年でした。万喜雄先生のおかげです。あの頃最終回、向井先生がよくボラロイドカメラを持参され写してくださいました。その頃の写真をみると顔は笑っていますが、肩にもものすごく力が入っているのがわかります。心と身体はひとつのものだと思いました。娘の死から20年、この講座を通して気づかないことを気づかされ娘の死を少しずつ客観的に見つめることができたように思います。自分の苦しみしか考えられない時ほど辛いことはないと思いました。毎回学校災害をとり上げてくださり娘の死を講座の中で話しさせて戴けたことは本当にありがたいことでした。まだ言っているの？言われそうですが、今もあの子と共に出席しているように感じています。多くの方に聴いていただけたことは本当にありがたく感謝の気持ちでいっぱいになります。

受講する度に「ああ来てよかった」と何度も言いながら帰ります。それに又北条のきれいな夕陽は最高のプレゼントなのです。こんな気持ちになれるこの講座を皆に知って、6回分の資料を再読しながら来年の講座を楽しみにしています。

#### (6) 「くらしと健康」講座を受講して

清水美紀子

30年以上続いている「くらしと健康」の講座を初めて受講し、素敵な半年間を過ごすことができました。今、映画「SICK0」の描く米国の医療問題について、身内から話を聞き講義を思い浮かべています。

初回に言われた3つの対話「自分、仲間、社会」を、いただいた資料と書き留めたメモで振り返ってみました。まず、【自分】は、日ごろ我が身を振り返ることなく日々の暮らしに追われてる中で、講義を聴くことの喜びと、自己反省の時間となりました。帰ってからは、参加する前よりいい自分になりたいなれるかな・・・との思いをいつも持つことができました。【仲間】は、多くの方と共に学ぶことができたことと、回を重ねるにつれ、少しずつ話の輪が

広がりました。参加者みんなの声を聞く“ひとこと”時間は、それぞれの暮らしがわかるような話で引き込まれました。悲しいこと、苦労していること、しんどいこと、これからの希望など、何でも話せる受け止めてもらえるであろう仲間と場、座長である万喜雄先生の温かさを感じました。安心して話せる場でした。そして【社会】、広く北欧や米国の多くのことを学び、愛媛、今治の良さもより実感しました。できれば、自分で見てみたいと思いをしています。

今、日本は近年になく厳しい暮らしの現実があります。少しでも安心して暮らせるよう、生活の背景と暮らしを考えていくことの大切さを改めて強く感じた講座でした。好きな言葉、「学ぶとは我にやさしさ刻むこと」この学びを大切にこれからの暮らしに生かしていきたいと思いません。

## II 成果と課題

2008年度の愛媛大学公開講座「くらしと健康」は49名が受講され、修了証書を授与された方が43名であった(修了率88%)。今年度は開講式に参加の寿教育学部部長によって、一人ひとりに証書を手渡せた。

さて、30年以上にわたって継続されてきた本講座はどのような特徴を持っているか。以下の3点に要約される。

第一は、地域に根ざした公開講座である。

この継続的な地域貢献によって、愛媛大学だけでなく教育学部の存在が支持されていることの一つではないかと自負している。

第二は、この講座の内容が生活に根ざし、世界に向き合う教養を目指していることである。例年映画の上映をプログラムに位置付けてきたが、今年度は「シッコ」や「食の未来」ビデオ「トスカの微笑み——障害児保育の実例」など視聴覚教材も有効に活用した。

第三は、参加者とともに作っていく講座である。講師による講義だけではなく、受講者の体験も生かして学びあっている。たとえば第3回の「発達保障」がテーマの時は、視覚障害者の特別講話があり、点字のことや仕事・人

生について学び、参加者は心動かされた。最終回の持ち寄り会食のひとときは楽しく、親睦を深めることができる。ここで来年の再会を誓うのである。

以上、住民の学習権を保障する大学公開講座では、①世界のひろがり、②仲間のつながり、③新しい自分の発見という学ぶよるこびに満ちている。おわりに、初参加の人の大阪からのうれしい便りを紹介したい。

「くらしと健康の講座に参加させていただき有り難うございました。2回しか参加できずとっても残念でしたが、不参加の分は資料で通信教育賜り有り難うございました。一番残念だったのは「シッコ」の映画を鑑賞できなかったこと。いつかまたアンコール上映のほどお願いいたします。今年度は夫と参加させていただく予定です。またご案内の方よろしくおねがいします。」

かつて地学団体研究会の井尻正二が『ともに学ぶよろこび』<sup>7)</sup>で明らかにしたように「学問の普及活動が研究活動(創造活動)を進展させる結びめであること」を自覚し、精進を重ねたい。その際、講座の受講者のことばは大きな支えである。

この30年、公開講座の開催にあたっては大学の職員、とりわけ教育支援課のスタッフにお世話になった。謝意を表したい。

## 参考・引用文献

- 1) 山本万喜雄『子育てはよろこび』創風社出版 2003
- 2) 山本万喜雄『共育はよろこび』創風社出版 2007
- 3) 『愛媛大学教育学部保健体育紀要』1-5号 1997-2006
- 4) 「朝日新聞」2006年12月17日付
- 5) 向井康雄「愛媛新聞」1991年6月9日付
- 6) 田中孝彦・森 由己『フィンランドの高校生たちが人生について考えていること』群青社 2008
- 7) 井尻正二『ともに学ぶよろこび』築地書館 1969